

## 第4回白馬村学校のあり方検討委員会 議事録

- 1 日時 令和3年7月2日(金)  
開会 午後4時00分 閉会 午後5時28分
- 2 会場 白馬村役場 3階 302会議室
- 3 出席者 委員 花岡 秋好  
委員 柏原 輝久  
委員 柏原 周平  
委員 高野美海子  
委員 徳武 信一  
委員 吉沢 一夫  
委員 松下 設吉  
委員 浅原 昭久  
委員 清水 蛍  
委員 塩島 弘之  
委員 窪田徳右衛門
- 説明者等 教育課長 横川 辰彦  
教育係長 中村 由加
- 4 報告 前回の会議で出た意見のまとめ  
①第3回会議で出た意見  
②望ましい学校の姿
- 5 協議 グループ協議  
①テーマと進め方について  
②協議  
③発表
- 6 議事の概要

### ○開 会

只今から第4回学校のあり方検討委員会を開会します。  
委員長、ご挨拶とその後の進行をお願いします。

## ○委員長挨拶（塩島委員長）

こんにちは。前回の会議では少子化に焦点を絞って、学校、家庭・保護者、地域、行政といったそれぞれの立場から少子化におけるメリット・デメリットについてご意見をいただきました。前回で出された意見を教育委員会に整理してもらったので、本日はまずその報告をしてもらう。それからこれまでの3月、5月の会議で出された意見から「望ましい学校の姿」というものを私の方でまとめさせてもらったので報告する。その後は、テーマごとにグループに分かれてざっくばらんな話し合いができればいいと思っている。そんな流れで進めさせていただきたいので願います。

## ○報告

（教育課長）

第3回会議で出た意見のまとめということで、資料を基に説明させていただく。

前回の会議では少子化というものがある、それに対する様々なメリット・デメリットについて皆さんからお話しいただいた。資料1の図は真ん中に少子化があり、そこから四方に学校、家庭、地域、行政とそれぞれの立場から出た意見をポイントで抜き書きし、関連性を線でつないで表している。

少子化を学校はどう考えているかということで、1クラスの人数の問題、教員減少の問題、多様性へ対応することへの問題等がある、それに対して、1クラス20人くらいであれば目が届く、学力向上にはICTが必要、多様性にはある程度の人数が必要、大人数であれば団結感や達成感があるといった意見も出された。また、教員の減から行事の工夫に繋がっていて、少子化に対応する学校については3方向くらいに問題が伸びている。家庭については、保護者の減少により役員の回りが早いとか、負担が大きいという問題が出された。地域については、子どもの減少により行事ができない、すなわち伝統が受け継がれないという問題が出された。教員の減、保護者の減、子どもの減により、今までやっていた行事や生活ができなくなるという方向に1つまとまる。ただ地域とすれば子どもは皆顔見知りで、地域で育てるという良さがある。行政で見ると、施設の老朽化や子どもが減ってくることによって1人当たりの経費が増えるという問題があり、新しい施設を建てるのか規模を縮小するのかという問題が出てくる。

少子化により、学校では学習方法の工夫が必要であり、学校・家庭・地域では新しい生活様式を工夫していかななくてはいけない、それに関連して地域はどのように学校と関わっていくのか、行政については施設整備をどうするか、という大まかな方向が問題としてまとめられた。

それを踏まえて、資料2にそれぞれの方向性ごとに事務局でまとめたものを記載している。一番下の矢印のスタートラインに少子化により学校の抱える問題点があり、どのようなポイントがあって、どのように対応していくのかということ事務局でまとめた。

学校ではクラスの減少や多様性の問題があり、一人一人に目が行き届くというメリットもある。ポイントとして1クラス20人くらいが良いという意見があったが、多様性を考えるならある程度の人数は必要で、少人数が必ずしも学力向上に繋がるとは言えない、専科教員が配置できる規模も必要という意見もあった。それらの対応策として、適正な規模の学級・学校のあり方、ICT機器を効果的に活用した学習方法を挙げてみた。次に「新しい学校生活・地域との関係」では、人数減で普通の行事開催が難しい、役員等で保護者の負担が増えるといった問題がある一方、地域の子どもの顔見知りなので地域で育てることができるといったメリットもある。ポイ

ントとして、学校行事の開催方法は工夫が必要であること、保護者と学校の関わり方も工夫が必要、地域と学校の連携協力をどうするかといったことが挙げられ、新しい時代に即した学校生活や学校・保護者・地域の連携協力体制の確立が対応策になると思われる。次の「施設整備」については、行政的なことだが財政負担について記載している。ポイントでは、適正規模の学級編成があり、その中でも魅力的な教育方針を打ち出していかなくてはならない、少子化時代に子どもたちへどのように魅力的な学びの場を提供していくか、ということでもとめた。

これらはあくまで事務局サイドとしてまとめたものなので、本日はこれをたたき台に議論をしていただければと思う。

(塩島委員長)

次に、私から説明させていただく。資料3を見ていただきたい。3月開催の第2回会議と5月開催の第3回会議で皆さんから出た意見を「望ましい学校の姿」という視点でまとめてみた。1番目は「一人ひとりに居場所があり、多様な人間関係の中で社会性や自立的な生活態度、主体的に判断する力を育む学校」ということでまとめてみた。その下にある○と△の項目については、○は良さや目指したい目標、△は課題である。2番目は「学習環境を整え一人ひとりに行き届いた指導を行うとともに、子どもたちの教育と学力向上に向けて指導力と専門性を発揮できる学校」ということで、○と△の項目は目を通してもらいたい。

3番目は「地域に学び、地域とともに歩み、子どもたちが誇りを持てる学校」、4番目は「学校施設の整備など、より魅力的で快適な教育環境を提供できる学校」である。

今までの意見をまとめたものとして、何か意見があればお願いしたい。急に言われても難しいかもしれないので、また何かあればこの後の話し合いの中で出していただきたい。

今後の話し合いの中で、皆さんから新たに出てくる意見や課題等も整理させていただく中で、できれば11月の答申に「少子化時代の学校の望ましいあり方」というものを盛り込んでいきたいと考えるがよろしいか。

(A 委員)

ぱっと見たところ、少人数であることが△が多くデメリットであることを強調しているように感じられる。何人が適正かという問題もあるが。

(塩島委員長)

わかりました。こういう意見が出ていることは事実であるが表現の部分については修正するというのでよろしいか。

(A 委員)

はい。

(B 委員)

この資料を見て、少子化問題の解決方法として子どもの人数を増やせば良いという方向になるのはまずい。それでは解決にならないと思う。着地点としてそうならないような形にしたい。

(塩島委員長)

△の表現がいけなかった。今日のところはこの形でということにさせていただく。

もう一つ別の資料を見ていただきたい。資料4以降については、これからグループに分かれて話し合いをしていただく上での参考資料である。まずこれらの資料について事務局から説明をお願いします。

教育係長が資料により説明

資料5は、平成26年に長野県教育委員会が、少子化の中にあって「長野県が示す望ましい学校、学級規模」というものを出しているのので、適正規模を考える上での資料になればということでもとり挙げた。「1. 学年に複数の学級がある規模であること」「2. 小学校では専科教員が配置できる規模にあること」「3. 中学校ではすべての教科の教員がそろえられる規模であること」「4. 児童生徒の興味や関心に応じたクラブ活動や部活動を開設できる規模であること」「5. 児童生徒が一定程度在籍している学級規模であること。複式学級にならない規模であること」とある。そして、まとめとしてこれら5点のことから「子どもに集団での学びを保障するために、学年に複数の学級がある学校規模が望ましい。少なくとも学年で20人程度を確保できることが望ましい。」としている。資料6は「学校規模が小さいことによる課題例」として、具体的な少人数・小規模学級の例から生じる学習面や生活面等でのデメリットについて示されている。

続いて、資料7は、前回の会議で示した白馬南小・北小の学年別児童数の推移である。令和9年までに児童数がどれだけ減っていくかということ、前回に説明させていただいたので、また参考にしてもらいたい。

資料8・9は新たな資料で、コミュニティ・スクールの関するものである。コミュニティ・スクールとは地域・住民・保護者の力を活用して学校を活性化することを目的として、各学校に設置されているもので、信州型と国型がある。白馬村は令和2年に信州型から国型に移行している。信州型と国型で活動内容にそれほど大きな差はないが、国型では教育委員会が学校ごとに「学校運営協議会」を設置している。国では、子どもや学校の抱える課題の解決、子どもたちの豊かな成長のためには、社会総がかりでの教育の実現が不可欠であるとして、地域とともにある学校づくりへの転換を進めている。コミュニティ・スクールは「地域とともにある学校づくり」に有効なツールということであるが、理想は地域と学校が協働で学校運営に関わることで、今現在、コミュニティ・スクールについて色々な動きがある。資料10の新聞記事は、大町市の「北小カフェ」について取り上げている。学区を超えて地域の人が集う場所として北小カフェが設けられ、大人たちの間で横のつながりや学び合いが生まれているという記事である。また、次のページは先日開催された「白馬中SDGsミーティング」をとり挙げたものである。地域の人を講師として招き、それぞれの分野で取り組んでいる講師の活動や説明を生徒が聴いて意見を交わす学習を行っている。講師として参加した地域住民は約20人で、学校での子どもたちの活動に地域住民が参加している状況が取り上げられている。地域とともにある学校づくりという点で参考にさせていただければと思う。

## ○協 議

### ①テーマと進め方について

(塩島委員長)

これからテーマ毎に3グループに分かれて、話し合いをしていく。テーマは「学習方法の変化」「学校・家庭・地域の連携」「学校施設の整備、教育環境の充実」。先ほど事務局が説明した資料も参考にいただければと思う。それぞれのテーマにおいて「魅力的で望ましい学校の姿とはどんなことだろう」ということを中心に話し合っていただければありがたい。今までの意見に拘らず、別の視点もあると思うのでぎっくばらんに話し合ってもらいたい。例えば、施設改善については緊急性が高いことでもあるが、統廃合についてこの委員会として結論を出すわけではないので、こういうことも考えられないかということで自由に意見を出してもらいたい。グループの中で、進行役と記録役を決めてもらい、最後にグループ毎に出た意見を5分程度で発表してもらおう。グループ分けについては、区長、PTA 会長、校長先生、公募・学識経験者の4つのお立場で3人ずついるので、話し合ってそれぞれのテーマにするかを決めてもらいたい。

### ②グループ協議

「学習方法の変化」

塩島委員長、浅原委員、高野委員、花岡委員

「学校・家庭・地域の連携」

清水委員、松下委員、柏原周平委員

「学校施設の整備、教育環境の充実」

窪田委員、吉沢委員、徳武委員、柏原輝久委員

各グループに分かれて、持ち時間45分でテーマについて話し合う。

### ③発表

(塩島委員長)

時間になったので、順番に各テーマの記録係の方に発表してもらおう。うまくまとめようとか、何かしらの結論を出すということではなくて結構。出た意見の羅列で構わないので、記録係の方は5分程で発表をお願いします。

「学習方法の変化」

(C 委員)

大きくは2つのことが話題になった。

#### 1 少子化に関わる適正化規模について

- ・皆、複数の学級があった方が良いという意見。
- ・固定したメンバーによる少人数の弊害で、意識を展開していくことが課題になる。

- ・北小も今後、令和10年くらいから単級になっていく中で、教員の配置はどうかということが話題になった。
  - ・老朽化もあるし、南小が1学年8人くらいになる年もでてくるので、そうなるとう統合も仕方がないのではないかという意見もあった。
  - ・いずれにせよ子どもには、白馬の良さを感じて将来羽ばたいてほしい、地域に誇りを持ってほしい。
  - ・昔、開田小で9人の担任となった経験があるが、固定的な関係を崩すために色々な方と関わるようにしていった。そのようにして少人数の弊害を乗り越える工夫もあることが話になった。
- 2 どういう学校にするのか、学校のあり方はどうしたら良いのか
- ・白馬は特に多様な子どもたちがいる。白馬中では多様な子どもたちへの対応としてICTを活用している。
  - ・多国籍という白馬の特徴から、すべての子どもたちが英語を話せる、そんな特色があれば良いのではないか。白馬ならではの特色ある学校を作っていくべきであり、そんな中で英語特区を申請するやり方もあるという話が出た。
  - ・少子化の中で、地域資源、地域人材を活用して、ICTや英語に特色を出して魅力ある学校作りを進めたい。
  - ・これまで通りのことをやるのではなく、はみ出て思い切ったことをやっていく、魅力を出していく白馬でありたいし、学校やPTAもそうだという話があった。
  - ・白馬は特色があり、多様な子どもたちのために今までの枠にとらわれず未来志向で新たな教育を進めていくことが、ニーズとしても良いのではないかということが、意見の大きな方向であったと思う。

#### 「学校・家庭・地域の連携」

##### (D 委員)

- ・白馬の学校で育って良かったと思ってもらいたい、その手段としてのコミュニティ・スクールが重要になってくる。
- ・コミュニティ・スクールは学校と地域がWin-Winの関係であって成り立つものなので、どちらかに偏ると続かなくなってしまう。続けるということは大切なこと。学校を中心に地域の力が高まるような関係性ができれば良い。学校を中心にするというのは、子どもの育ちを中心にするということ。
- ・もしも、南小がなくなってしまうと、地域がすぐに寂れることはないが、学校の近くに住もうという家庭も多いので、南小エリアの人数がどんどん減ってしまい、結果的に寂れていくだろうと予想する。
- ・白馬で育って良かったと思ってもらうために、私たちはどういう関わりができるのかという点について
- ・地域の人が定期的に学校に来て、白馬に住んでこんな仕事をしている、白馬ではこんな仕事ができる等、子どもたちに伝える授業をする。
- ・クラブ活動等で地域の人に学校に入ってきてもらう。
- ・ボランティアでの学習支援の実施（読み聞かせ等）

- ・スキー等の特徴的な学習、白馬ならではの特色ある学習を行うことで、学校を卒業した後誇りに思えるのではないかな。
- ・地域の人に大切にされたと思って育ってもらいたい。地域に大切にされたと感じることが、白馬で育って良かったということに繋がる。また、入学式・卒業式で村長の話の直接聴くこと、子どもたちを大切に思っていることを伝えることは大切な機会と考えている。
- ・大町北小の「北小カフェ」を白馬南小でもやりたい。
- ・新しい学校生活の工夫として、学校が1つになってしまうと、子どもの選択肢がなくなってしまうので、1校になるのであれば民間委託等、別の選択肢も考えてもらいたい。

#### 「学校施設の整備、教育環境の充実」

##### (E 委員)

- ・南小・北小はやはり老朽化している。特に廊下等。南小に関してはランチルーム等がある木造校舎の方が新しいが、木造故に使いつらいところもあるという意見があった。
- ・老朽化のため手を入れてもらいたい箇所は多々あるが、小まめに改修を行なって大切に使用していったら良い。日々の管理で学校を守ることをしてもらいたい。
- ・統合の話もあるが、このグループでは、基本的に少人数の学校を理想と考える意見が多かった。
- ・特に南小の人数が減っていくことへの対応として、白馬村全体で通学区の見直しを行なったらどうかという意見が出された。今は神城・北城で南小・北小という分け方を行っているが、南小の人数が減るのであれば、通学区を見直して南小の人数を調整したらどうか。
- ・南小は土砂災害危険区域に入っていることから水害等の避難所になれないが、RCの建物があるので校舎を残した方が良いのではないかな。
- ・通学路に関して、三日市場方面は1km以上全く家がない場所があり、見守り等ができないという問題が出された。しかし、危険な場合もあるかもしれないが、小学校は基本、歩きの通学を推奨したい。
- ・中学生に関しては自転車通学がとて多く危険はないのか、また、遠距離の場合は保護者の送迎の負担が大きいという意見があった。
- ・南小の裏山スキー場や北小のジャンプ台は特色ある施設なので、なんとか続けてもらいたい。
- ・施設が古くなってきて、人数が少ない子どもが掃除をするのも大変だが、個々が責任感を持ってやらなければならないので、それは良い点でもあると思う。

##### (塩島委員長)

ありがとうございました。お聴きすると非常に多様な意見が出ていて、面白いと感じた。今日出た意見も整理し、今後の話し合いに役立てていきたい。

##### ○その他

##### (塩島委員長)

次回の検討委員会の予定について事務局から説明をお願いします。

(横川課長)

次回の検討委員会は7月の下旬を予定しているが、その前に、実際に学校の現場を見ていただいた方がよろしいと思うので、学校と調整して、学校の老朽化や子どもの様子等を見る場所を設定したいと思う。参観は7月中旬、会議は7月下旬ということをお願いする。

(塩島委員長)

この検討委員会は7月～10月の月1回の開催で、あと4回を予定している。この委員会の持ち方について意見があれば、私か教育委員会へお寄せいただきたい。実情を知る上で学校の現場を見ることはとても役に立つと思うので、よろしければご参加いただきたい。追って事務局から連絡が行くのでお願いする。

○閉 会